

「遊佐町・食べる手・作る手・つないで食の再興計画」

飼料用米が
日本の食卓を救う



僕たちの
食べているのが
飼料用米です

生活クラブの飼料米取組

サステイナブルなひと、



生活クラブ

生活クラブ生協連合会
連合消費委員会委員長
藤田 ほのみ

生活クラブ生協組織概要

設立	1965 年(生協設立 1968年)
組合員数	344,026 人(2015年2月末実績)
会員単協数	32単協 (首都圏を中心に北海道から関西地方)
供給高	815 億円(2013年度末実績)
出資金在高	377 億円(2013年度末実績)
関連会社	牛乳工場(千葉・栃木・長野)、養鶏場(埼玉)、肉牛牧場(北海道)、販社、物流 etc.

生活クラブ共同購入の沿革

1965年	生活クラブ誕生、牛乳の共同購入開始
1968年	生協法人として設立
1972年	遊佐町とのコメの提携はじまる
1972年	生活クラブ独自規格の消費材開発スタート
1974年	平田牧場との豚肉の提携はじまる
1978年	牛乳工場・肉牛牧場設立 「生産する消費者」
1989年	「もうひとつのノーベル賞 (RLA) 」受賞
1990年	生活クラブ連合会結成
1995年	国連 50th 記念「50 のコミュニティー賞」受賞
1997年	遺伝子組み換え食品(GM)不使用宣言

「消費材の要件」

- ① 使用価値の追求(商品ではなく消費材)
- ② 生産者の再生産を保障する**適正価格**
- ③ 原材料・生産工程・流通・廃棄全体の**情報公開**
- ④ 「安全」「健康」「環境」の諸価値の追求
- ⑤ 国内自給と自然循環の追求
- ⑥ 生産者と消費者の相互理解と連帶
- ⑦ 奪わない・奪われない、持続的な生産と消費

生活クラブの「ビジョンフード」実績

★生産に掛かる「空間」と「時間」を踏まえ、将来(展望)を計画的に描く品目—ビジョンフード

年間取組量は2013年実績/飼料用米生産使用実績は2014年実績

主要品目	年間取組量	特　徴	飼料用米生産・使用状況
米	15万俵	主産地(4産地)+3産地	63,107俵、提携生産者に出荷
牛乳	1,300万本	900ml牛乳(72°C15秒殺菌)	飼料用米36t、WCS283t見込
豚肉	80, 000頭	LDB三元豚	前期10%後期10% : 4,800t 前期10%後期15% : 7,200t※
牛肉	3, 200頭	飼料添加抗生物質不使用	栃木県:米240t、WCS304t
鶏肉	160万羽	国産鶏種「はりま」	2生産者で773tを使用
鶏卵	4,000㌧	国産鶏種「さくら」「もみじ」	6生産者で3,267tを使用

※2014年11月より後期15%に拡大。数量は配合比率に基づく年間使用量。

飼料用米に取り組んだ問題意識

- ◆食料自給率(カロリーベース)40%、増大する世界人口と食糧危機
- ◆農業従事者の高齢化
- ◆減反率40%、農地は大切にしたいが何を作ればいいのか
→水田は水田として活用するほうが良い
- ◆飼料を輸入に頼る事への不安
GM作物の広がり、輸入飼料の高騰

2004年～飼料用米プロジェクト

構成団体

遊佐町
共同開発米部会
生活クラブ生協
平田牧場
全農庄内本部(旧)
JA庄内みどり
北日本くみあい飼料

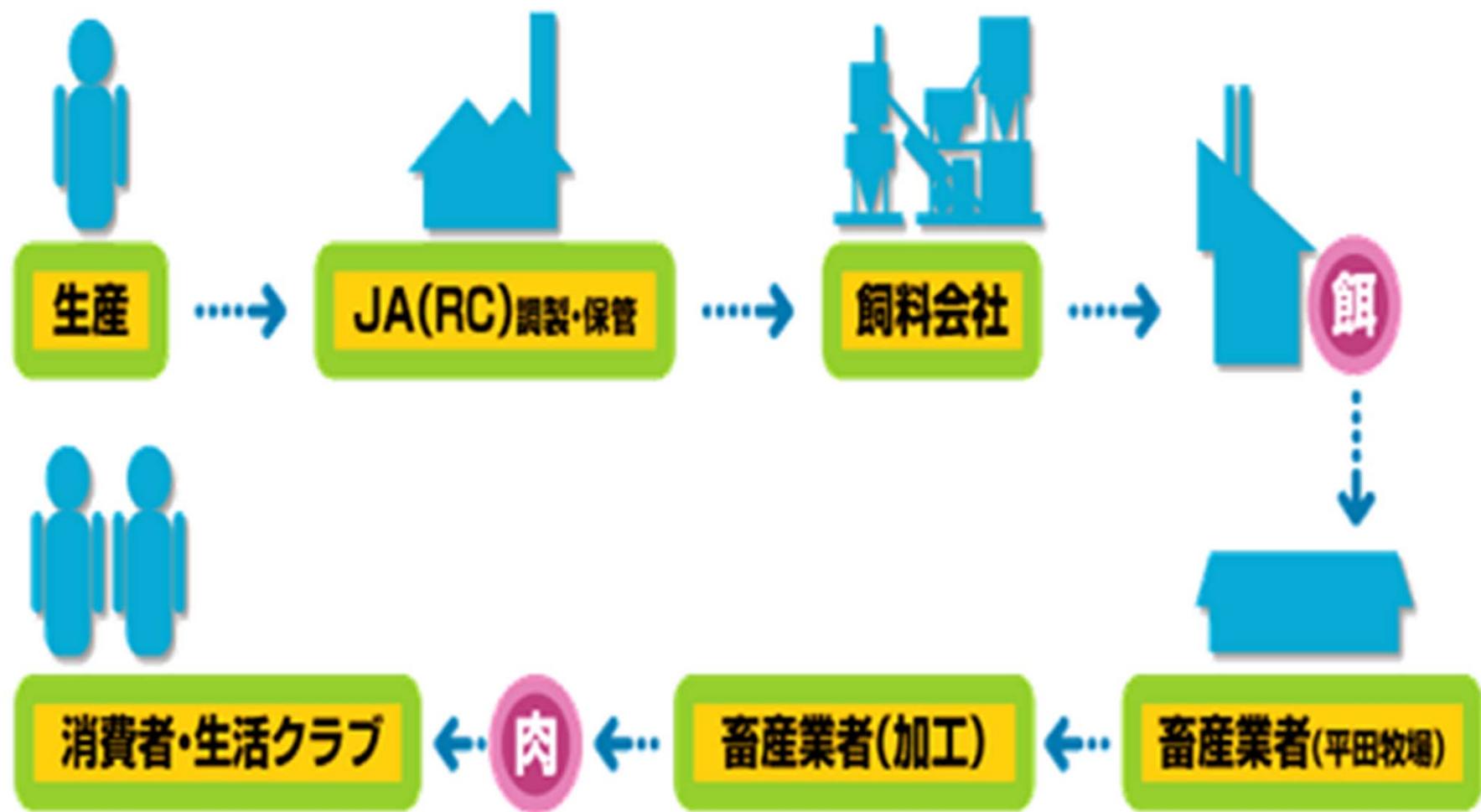
助言・指導

(独)東北農業研究センター水田利用部
(独)山形大学農学部
山形県庄内総合支庁酒田農業技術普及課

プロジェクトの事業内容

- ① 産地に適した飼料用米の品種の選定
- ② 生産費並びに構造改善の具体策
- ③ 家畜給与における肉質の調査
並びに食味への影響
- ④ 飼料用米生産による国内自給率
向上効果の調査等

飼料用米の流れ



遊佐町農業の特徴

1. 環境保全型農業の推進

特別栽培米等作付拡大 1,300 ha (63%)

2. 消費者と一体なった農業の推進

3. 飼料用米生産を軸に耕畜連携の推進

4. 施設園芸の導入による経営の複合化

生活クラスの遊佐の米

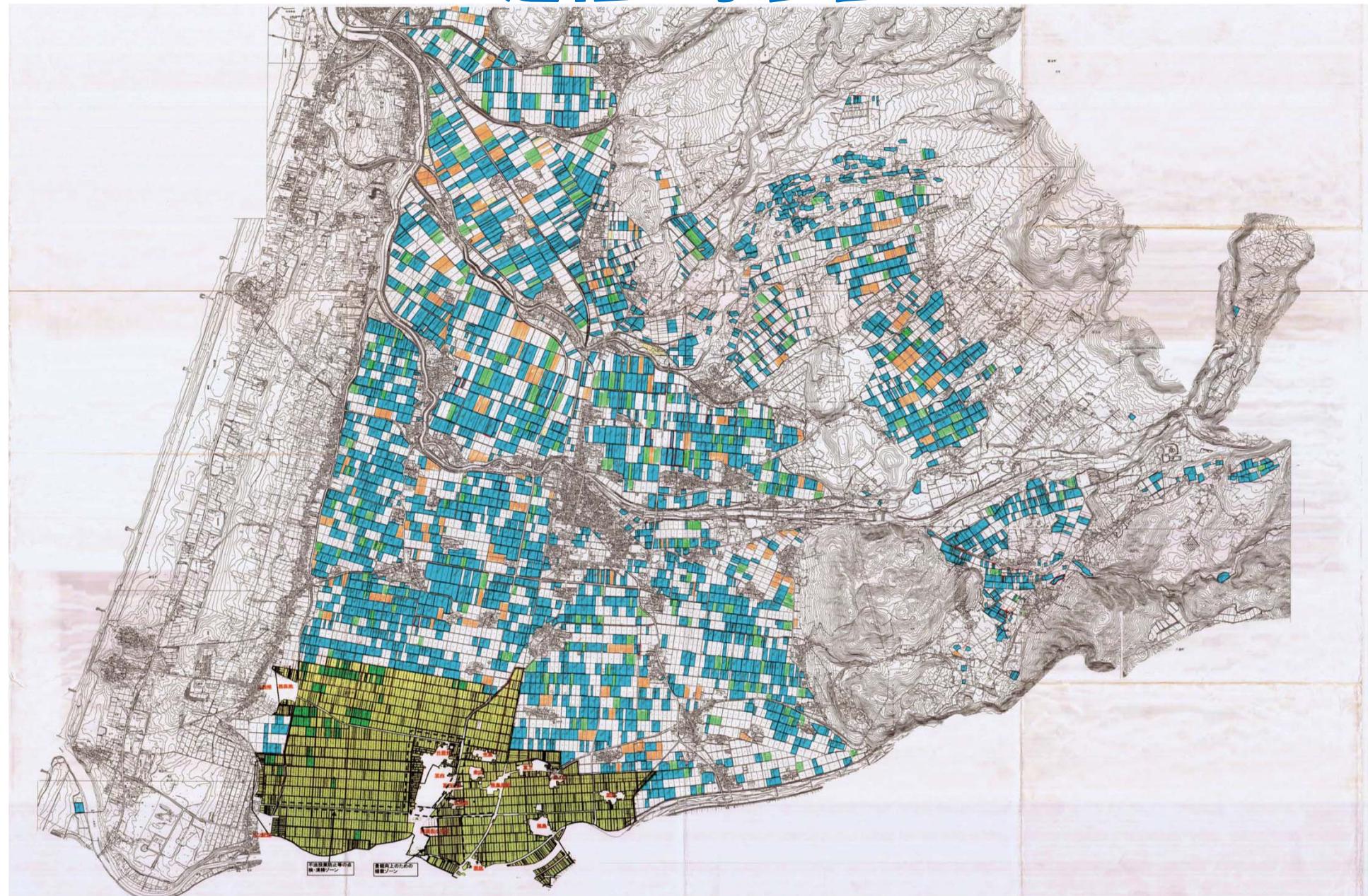
○ 遊YOU米（共同開発米）

- ・年間10万俵消費/遊佐生産量17万俵
- ・ひとめぼれ(80%) × どまんなか(20%)
- ・8成分回数米が基本(13,800円/俵)
- ・通年予約を基本とする消費

○ 共同開発米基金

- ・作況悪化への備え
- ・実験による収入減に対する補てん

遊佐の水田図



生活クラブの豚肉(平牧三元豚)

① 平牧三元豚 = LDB

⇒ 多くはLWD

* 中国豚（金華豚）

② 飼養期間：約 200 日

⇒ 一般は 160~180 日

L = ランドレース
D = デュロック
B = バークシャー
W = 大ヨークシャー

③ 肥育コンセプトは「健康な豚」

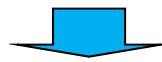
⇒ 独自の一貫生産・加工流通システム

④ 平田牧場 15 万頭/年のうち

生活クラブは 8 万頭を消費

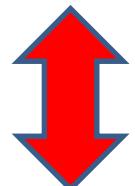
飼料用米取り組みの優位性

少子化による主食用米消費の減少、生産過剰傾向
米価の下落・後継者不足、生産調整の強化
⇒優良農地の荒廃・持続的な生産体系の崩壊



「飼料米」=全畜種が給与の対象となる

稻ワラ・セルロース部の
利活用



X 水稲ホールクロップサイレージ=対象畜種「牛」



既存の機械を利用し水田を水田として活用
田んぼにコメを作りたい…夢の実現

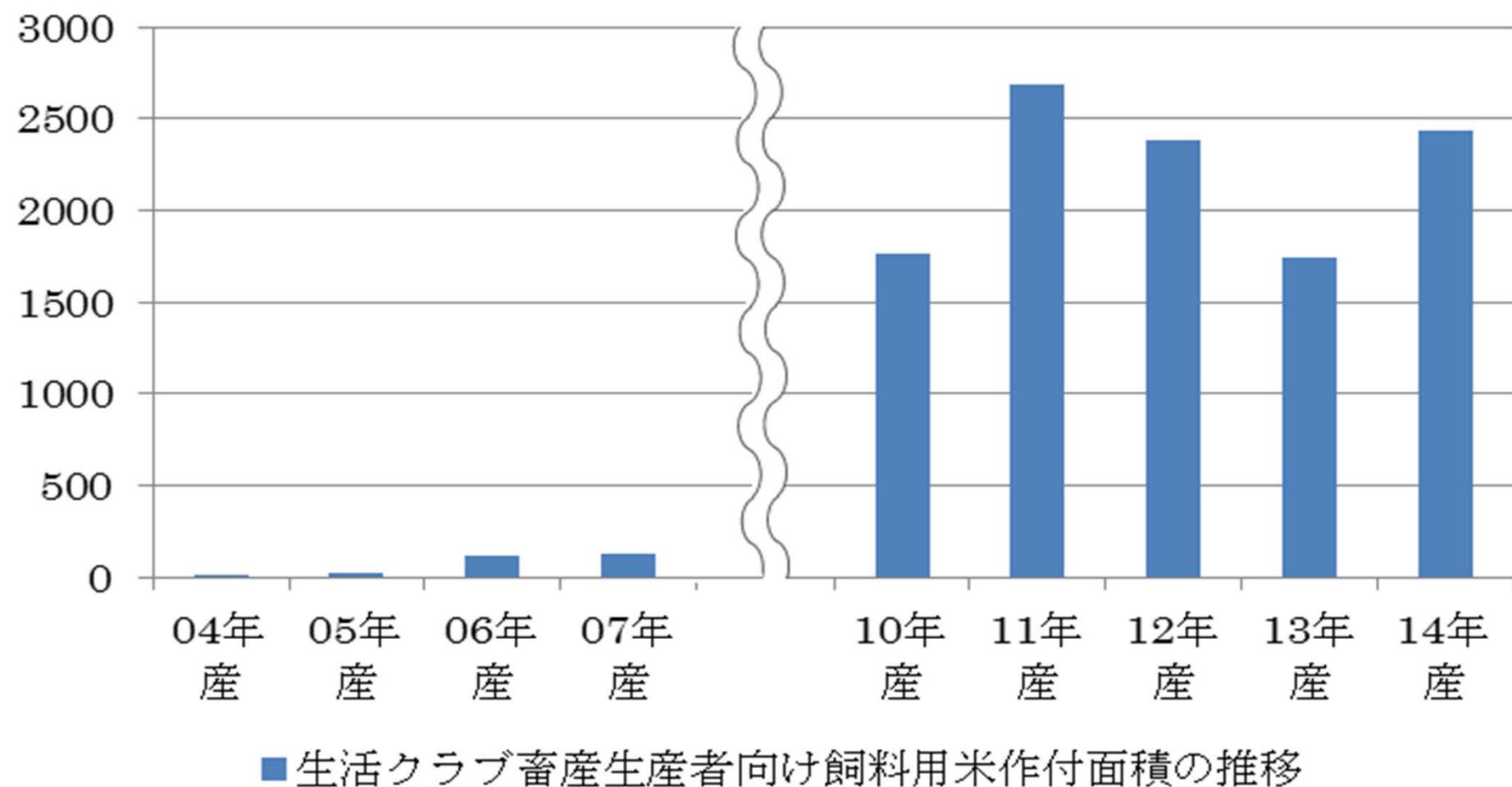
(まとめ)飼料用米の意義・目的

- ◆水田フル活用による農地の保全(減反の解消)
- ◆素性の確かな自給飼料生産(耕畜連携)
⇒ 究極の NON-GMO 飼料
- ◆循環型農業の確立(家畜排せつ物の利活用)
- ◆連作障害の回避(新たな水田輪作の展開)
- ◆すべての家畜に給与でき食味も向上
- ◆水田機能(治水)による温暖化防止
- ◆トウモロコシの輸入代金の国内(地域経済)還流
- ◆日本の食料自給力の向上(食料の安全保障)
⇒ **水田作の本作に！主要飼料穀物に！**

飼料用米取組年表

	生活クラブの取り組み	国の政策など	全国作付面積
2004年	山形県遊佐町が[食料自給率向上特区]に認定 飼料用米プロジェクトスタート		44ha
2005年	11月より平田牧場で給仕開始		45ha
2006年	飼料用米シンポジウム開催、食味評価 「こめ育ち豚」取り組み開始		104ha
2007年	3ヵ年まとめ、プロジェクト解散 ⇒「食料自給率向上モデル事業推進会議」へと改組、 メンバーをさらに広げて活動	輸入穀物の継続的な高騰、量的確保の懸念	292ha
2008年		飼料用米に新たな助成金	1611ha
2009年	生活クラブで取り組む豚肉が全頭「こめ育ち豚」に 牛肉、鶏肉、鶏卵に飼料用米の給仕が拡大		4129ha
2010年	飼料用米フォーラム(横浜)開催		14883ha
2011年			33955ha
2013年		米の政策転換	21802ha
2014年	一社日本飼料用米振興協会設立に参加	数量払い制度への移行	33881ha

生活クラブ畜産生産者向け飼料用 米作付面積の推移



*13年産は、国の施策の変更や、耕作提携生産者の提携終了により家畜への給餌率を制限した取組みとなりました。
*14年産は計画の数値

畜種毎の飼料用米取り組みの到達点

	豚 肉	牛 肉	鶏 肉	鶏 卵	牛 乳
生産者	平田牧場	栃木県開拓農協	(株)秋川牧園	群馬農協 チキンフーズ (株)	生活クラブたまご(株) 常盤村養鶏農協 (株)AIC 会田共同養鶏組合 幾見養鶏 (株)美濃愛農産直
飼料用米産地	JA庄内みどり JA加美よつば 栃木開拓農協	栃木県開拓農協 (全農栃木 JAなすの)	山口瀬戸内グ ループ		栃木県開拓農協
配合率	肥育前期10% 肥育後期15% ⇒給仕試験 肥育前期15% 肥育後期30%	開拓牛 肥育前期5% 肥育後期10% ⇒給仕試験 肥育後期20% ほうきね牛 肥育前期5% 肥育後期3%	肥育後期10%	肥育中期5% 仕上げ期10% ⇒給仕試験 仕上げ期 20%	4%
飼料用米 使用量 2014年実績	2014年実績4800t 2015年計画7200t 2016年計画10000t 2017年計画12000t	263t	353t	420t	2014実績36t 2015計画100t

飼料用米の生産から消費までの課題

- ・ 多収性専用品種の種子不足
- ・ 低コストでの生産・保管・流通
⇒フレコンやバラ流通、糊米での保管・給与など
- ・ 飼料用米検査制度の負担軽減(弾力的運用)
- ・ 飼料用米交付金制度の継続
- ・ 地域での耕畜連携(畜産堆肥の活用・循環)
⇒地域の農業を支える仲間として手を結ぶ
- ・ 消費者の理解と確実な消費